

本人は闇船を買って南下した。

二十一年四月頃、もとの勤務先の係から迎えの車がきて、会社の近くの社宅へ入れられた。同じ係にいた熊本出身の岩本さんと二人だけ技術指導をたのまれて残留することになった。約一年ほどやった。いよいよ引揚げの船がくるので会社から送別の宴とせん別金の八千円をもらった。

二十二年一月、佐世保港に着く。満州朝鮮の引揚げ者はまるで乞食姿、台湾引揚げ者は立派な姿だった。七十八歳の今日まで生きている。

## 北鮮より帰る

兵庫県 住田 照雄

昭和十六年七月、父の転勤のため、朝鮮咸鏡北道清津府に移転する。昭和二十年当時の家族構成は、父、母、

弟、妹二人と従姉妹の計八人であった。八月十三日未明、その頃避難命令が出ていたが、人づてに解除と聞き、避

難先より自宅に帰り、昼食後、家族と話をしていたとき、

銃弾の音がするので表に飛出し、漁港のほうを見ると、約百五十メートル前方に横一列でソ連兵が銃を撃っている姿が見えるので、さあ、たいへんと家族に知らせ、一目散にリュックサックを肩に避難、その後家には帰らず、羅南より無蓋車の避難列車に乗り、父の会社の事業所がある新浦で下車。二十日、保安隊より呼び出しがあり、日本刀及び武器の提出を求められた。九月一日、映画館に全日本人は収容され、土間に寝起きさせられ、食事の煮炊きも館内だし、便所にいたっては人数の割りに少なく、不衛生であった。二週間を過ぎた頃、「各人出発せよ」とのことで、出発前に保安隊で身体検査をされ、時計、高額貯金通帳、貴重品などは没収された。妹二人を背負い、ソ連軍のトラックが通るたびに身を隠し、部落を通るときには、幼児のおしめの中まで持物いっさいの検査を受けるため、海岸に出て海路で行くことにし、漁民と交渉して興南の漁港まで乗船することになった。興南に到着し、日本人会の人の世話で、山の中腹にある旧日本軍の監視所跡の兵舎に案内され、割り当てられた

板の間にむしろとカマスを敷き、寝るときには衣服のままカマスの中にはいり寝ることにした。最初の頃は帰国も早いと思い、食事の材料は手持ちのお金で購入していたが、後日には高粱が主食となり、海岸で昆布、ワカメを拾い、漁港に行き、明太の蔵物を貰い、海水を汲み、調味料にする毎日であった。

風呂にもはいらず着替えはなく、服や靴下は幾重にも継ぎあてをし、使用しているのでシラミがわき、天気の良い日はシラミ取りをするのが日課であった。正月前のある日、小生が盲腸で痛み苦しんでいるのを見かねた満州で薬局をしていた人がモルヒネをくれ、命拾いをしたことは一生忘れることはできない。三歳になる妹も栄養失調のためはうこともできなくなり、この頃、毎日のように栄養失調とチフスのため死ぬ人が出るようになった。二月より日本人に対して米の配給があるようになった。配給を受けると、帰国費用のため、一口も口にせず、すぐ換金するようにした。南鮮に行く船があることがわかり、国境を越えるために船賃として大人から赤ん坊に至るまで一人千円を支払う。四月二十四日深夜、漁船の

狭い船倉につめこまれ、船外に出ることは固く禁じられた。二日前に出た船が元山沖で捕らえられたとの情報があり、心配したがぶじ注文津の漁港に上陸すると白い粉を頭から服の中までかけられ、それから行き先々で白くなるありさまであった。

翌朝、米軍のトラックに便乗し、蔚珍へ。蔚珍より日本人乗組員の船で釜山に。釜山ではお寺で休息し、夕方日本行きの船に乗り、その晩は、夢にも見た祖国に帰れると思うと興奮して眠れず、朝方うつらうつらしていると、「見えたぞー」の声に起こされた。三歳の妹ははうことができなくなっていたが、よくぞ一人も欠けずに八人全員無事に仙崎港に上陸することができた。ときに、昭和二十一年四月二十八日であった。

## 敗戦と北朝鮮からの引揚げ

北海道 位田邦夫

私達一家は祖父が日韓併合前朝鮮黄海道沙里院邑西里